



# 切磋琢磨

【発行日】平成30年1月16日

【発行者】角田高等学校  
校長:鈴木 琢也

【連絡先】0224-63-3001

## 平成30年がスタートしました！今年もよろしくお願いいたします！

穏やかに新年を迎えました。年末年始は家族でゆっくり過ごせたでしょうか。

最近、人工知能（AI）の進化に関するニュースをよく目にするようになりました。科学の進歩はめざましく、自動運転による車の実用化や、将棋や囲碁で世界のトップ棋士がコンピュータに敗北しています。年明けの全校集会では、「Society（ソサエティ）5.0」という日本政府が推進している事業を取り上げて講話しました。

「Society5.0」とは、インターネットなど仮想の“サイバー空間”と私たちが暮らす“現実社会”が高度に融合した「超スマート社会」を未来の姿とし、その実現に向けた一連の取組を言います。あふれるデータの中から必要な情報を取り出して分析したり、少子高齢化や地方の過疎化などによる様々な問題をAIの力を借りて解決しようというのです。

超スマート社会では、例えば農業分野ではロボット技術や情報通信技術を駆使して農作業を省力化、精密化したり、ドローンで農作物の生育状況を空撮し肥料の配分を最適化することもできるようになります。ドローンによる過疎地山間部での荷物配送は、既に検討されています。介護分野ではAIを搭載した人型ロボットが千か所の高齢者福祉施設に導入され、利用者と話をしながら相手に合わせて話題を提供しています。また、歩行補助をはじめとする様々なサポートを行う介護ロボットは、介護の質を高めながら家族の負担も減らします。医療分野では、タブレットやスマホを通じて患者を診察する「遠隔診療」により医師不足の地域へ医療を提供したり、独居高齢者の見守りにも活用できます。

肉体的労働や単純作業の多くがAIに代替され、AIが身の回りにあふれる時代が急速に現実味を増してきています。これからの時代は「AIを活用して豊かになる人とそうでない人との二極化が起きる。ITを使いこなす人と、AIやロボットの普及で仕事を失う人の所得格差が深刻なほど拡大する」と指摘する声もあります。

『機械化で消えてなくなる仕事知り将来の夢決められずいる』ある高校1年生が読んだ句です。科学技術の進展に伴い、産業革新にとどまらず、社会構造までがこの数年で大きく変わると言われているこれからの大変な時代を生き抜いていくためには、先を見据えて何をすべきなのか見極める目を持つことが必要なのだと思います。そのためには、世の中の動きやあらゆることに関心を持って、アンテナを高くして情報を収集し、様々なことに前向きに挑戦し、成長し続けることが大事だと感じます。

## 平成30年度大学入試センター試験が行われました！

平成30年1月13日（土）、14日（日）の2日間にわたり大学入試センター試験が行われました。県内12会場のうち、本校は仙台大学と尚絅学院大学の2か所が割り当てられました。両日も天気には恵まれましたが、晴れた分気温が下がり13日（土）朝の外気温は-7.5℃とこの冬一番の冷え込みでした。厳しい寒さの中、本校からは62人が受験し、3学年の先生方も激励に駆けつけました。

3年生の6割は就職やAO、推薦入試により既に進路が決定しましたが、一般受験を控えた4割の生徒はこれからが本番になります。辛い時期だと思いますが、進路決定に向けて最後まで諦めないで取り組んでほしいと願います。ご家庭におかれましても、もう少し応援をお願いします。



## 国際理解活動講演会 ～同時通訳者と異文化コミュニケーション～

平成29年12月18日(月)日英通訳者の莉々紀子氏を講師にお招きし、国際理解活動講演会を開催しました。莉々先生は、もと県立高校の英語教師でしたが、通訳になりたいという夢を諦めきれず独学で勉強し、通訳者になりました。現在は通訳・翻訳サービスを主とする事業を立ち上げ様々な分野で通訳として活躍されているほか、大学の講師やラジオパーソナリティなども務めています。

当日の講演の概要を紹介します。

10歳の時にテレビで見た通訳者が格好良くて、通訳者になりたいと思うようになった。中学の時は英語オタクで、英語を勉強しないと気持ち悪かった。通訳の仕事は主観を捨てるところから始まる。感情まで通訳してしまうとトラブルになることがあるので、感情の通訳はしない。講演会の通訳など感情を込めて通訳する場合もあるが、ニュースの同時通訳や警察での取り調べの際には感情を抑えてマシンになりきる。

英語を母国語としていない国の人の通訳も行う。第二言語以外の国でも英語を使っている国が多い。国によってそれぞれ発音に特徴があり、その特徴をつかむことが大事である。TOEICは、今の社会人は強制的に受けさせられる。英語ができないと昇任もできない。学校の勉強が通訳の仕事に役立った。

日本に住んでいる外国人は約10%。自分達が当然と思っていることが当然でない場合がある。それが異文化であり、一生懸命知ろうとすることが大事である。コミュニケーション力がある人とは、自分を表現できる人、人見知りしない人。

通訳の醍醐味は、多くの国の人と話ができ視野が広がることである。



### ●特別寄稿 その5 「臥牛が丘 雑感」 主任技師 齋藤仁

私にとって、最初の臥牛が丘の思い出は今から40数年前の入学試験当日です。受験生の自転車置き場が、現在の1年生の自転車置き場でした。そこから見える角田の町並みは新鮮で今でも覚えています。

部活動は空手道同好会に入部し、同期は20数名いました。5月14日の臨時生徒総会にて部に昇格し、部員50数名は嬉々として部活に励みました。夏休みに国士舘大学空手道部の夏合宿が角田市民センターであり、初めて見る大学生の空手の厳しさに驚き、恐れさえ感じましたが、それでも部活に励んでいました。好きだった空手も、1年生の終わり頃、10数名の1年生が一斉に退部し、私もその中の一人でした。同じ学年で3年間通した者は4名でした。今でも空手部の道場に入ると、気の引き締まる思いとほろ苦い思いがあります。その後は、友人に誘われるまま、ギター愛好会や演劇部に籍を置き、それはそれで充実した時を過ごしました。

そんな私が30数年ぶりに、また臥牛が丘に登ることになるとは思っていませんでした。丁度、西校舎建設中でプレハブ仮設校舎の時でした。工事のため立ち入り禁止の所もあり、また、あの震災もあり、思いに浸れたのは落ち着いてからでした。学生当時を思い出しながら見てみると、昔あった大イチョウの木も無くやぶ化している所もありました。学生当時、生物の滝口政彦先生が授業の合い間に「臥牛が丘には、多種多様な植物があるからよく見てみる」と言っていたのを思い出し、注意深く見てみると多くの植物があるのが確認でき、それからはできるだけそれらを残しながら景観を保つ草刈りに切り替え、今に至っています。臥牛が丘には桜の木だけで124本、30種類以上の植物があります。春のフキノトウに始まり、イタヤカエデやカラ松の紅葉落葉に至るまで折々に楽しめます。生徒の皆さんも、スマホばかり見ていないで、たまには臥牛が丘の植物たちにも目を向けてほしいと思います。

最近、友人がサーフィンを始めました。「どうした」と聞くと「前からやってみたかった。ただそれだけ」とのこと。こんな刺激をもらえる友人と出会えたのも臥牛が丘です。